
同じ顔ですが何か？

さゆ & 梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同じ顔ですが何か？

【Nコード】

N2623X

【作者名】

さゆ&梨

【あらすじ】

普通に平凡に、孤児として過ごしてきた沢田綱吉少年の生活は中学入学が迫ったある日から一変した。「って、展開いきなりすぎるだろおおー！？！？」この物語は、同じ顔三つ巴というネタを面白がった二人がリレー形式で送る、沢田少年の受難の物語である。「何でオレなの？！ 中心はアラウデイさんとか風先輩とかヒバリさんとかなの！？」さあ。「オイ！！」あ、現代パラレルです。

注意書き

この物語は、BL要素を多く含みます。更には精神的近親相姦です。肉体的要素が入る予定は今のところありません。

雲雀↓風↓アラウディ↓雲雀の同じ顔三つ巴となっています。ちなみに異母兄弟設定です。

上記の設定中心に話が進みますが、あくまで主人公は沢田綱吉です。

初めの方は綱吉の状況を説明しつつなので三つ巴要素が少ないです。

上記設定の三人以外は（たぶん）普通にノンケだと思えます。今のところ。

続きから、登場人物設定となります。

登場人物（前書き）

随時更新。

登場人物

○ 沢田綱吉

三歳の頃交通事故で両親を亡くした。以来養護施設で育つ。
やや人見知り。原作ほどダメっ子ではない。平々凡々。
やたら運に恵まれた子。しかしその運は幸運と悪運が入り混じっている。必ずしも良いものではない。
運のせいで様々な経験をしているため、思考が柔軟。
お人好しで、物語の中ではかなりの常識人。ツツコミ。
好きな人ができて、良い人止まりなタイプ。

□ ジョット

綱吉の従兄で義兄。六つくらい上？大学生だけど実業家。何をしているのかは秘密。
本人曰く、両親の命令で一定の年収に達するまで迎えに来てはいけなかったのだとか。

思考が金持ち。お兄ちゃんぶりたい。天然腹黒な微ブラコン。
仕事はデキる。結構良い上司。でもそこそこの話を聞かない。
第六感が優れているらしい。
好きな人には結構尽くすタイプ。フェミニスト。

□ アラウディ

ジョットのハイスクール時代からの友人。で、現在部下。
弟達とは連絡は取っていたが顔を合わせるのは十数年ぶり。

天然。ジョット達同世代から常に守られているのに気付いていない。一番の防波堤は風。

その仕事ぶりはジョットが最も重用するほど。

時々下の弟からの視線が気になって仕様が無い。

好きな相手には正面からぶつかっていくタイプ。

●風

一つ下の弟とは物心ついたときから一緒に生活している。

口調は丁寧で物腰も柔らかいが腹黒。純粹に兄弟一性格悪い。

とある研究の関係で“同朋”と呼ぶ七人の友人がいる。

少し年の離れた兄が可愛い。でもたぶんブラコンではない。

弟の気持ちには薄々感づいてる。でも何も言わない。

好きな相手には逃げ道を無くし搦め手でいくタイプ。

雲雀恭弥

一つ上の兄とは物心ついたときからつかつかっている。

興味の無いことには一切見向きもしない自己中理不尽さん。

どんな卑怯な手を使っても勝てない兄に憧れのようなものが芽

生えた。

その兄が見ている上の兄に時々敵意を向けている。（そして誤爆。）

小学校高学年の頃から並盛を支配し始める。

ツンテレ？すぐに手…トンファーが出る。

好きな相手には無言で迫ってびびられ逃げられるタイプ。

六道骸

生徒会会長。風紀委員長とは犬猿の仲。でも仕事はちゃんとする。

中学二年にして子持ちな心境の苦労性。

年の離れた兄を家族と認めていないが、金だけはせびっている。人の上に立ってアレコレと命令しつつ楽しむのが好き。

…だのに実際は生徒会の中で一番自身が働いているという…好きな相手は兎に角口説き落として尽くしてもらうタイプ。

柿本千種・城島犬

生徒会役員。骸の家族兼居候。

○クローム髑髏／凧

生徒会役員。骸の家族。従姉弟の義叔母の娘。

小学生の頃両親の離婚が原因で何故か天涯孤独に。

暫し綱吉と同じ養護施設にいたのでちょっぴり仲良し。

家族として迎えてくれた骸達のことを大切に思っている。

好きな相手には不器用ながら尽くそうとするタイプ。

○山本武

養護施設に併設された幼稚園に通っていた綱吉の幼馴染で親友。

綱吉の体質（運）のことを本人よりも知っている人物。

昔は天然発言の多い綱吉の突っ込み役だった。

野球大好き。将来の夢は野球選手。
中学に入って、波乱万丈化した綱吉を支えている。
好きに相手には直球で向かっていくタイプ。

■ D・スピード

通称ヌッフ野郎。本編には恐らく通称でしか出てこない。
ジョットの部下。海外に飛ばされている。
血縁者から上司からも（更には作者達からも？）疎まれている
ある意味不憫な人（笑）

□ 浅蜷雨月

山本の遠い親戚。京育ちの歌舞伎役者。
後援者であるジョットとは京都で偶然知り合っただけ。
時々山本の家に滞在してはジョットと語り明かしていく。

□ G

ジョットの幼馴染で、部下。時々守り役とか呼ばれる。
割と感情表現が下手。弟に突っかかるのが実は悲しい。
ジョットの天然腹黒で人の話を聞かずやりたい放題する面に日々
胃痛を痛くしている。
無駄に舌の肥えた上司のために 何 故 か 料理の腕前を
かなり上昇させられた。

●リボーン

自己中のナルシスト。なまじ容姿が整っているので困りもの。滅多に授業には出ない。出るのは教師をいじるとき、アリアに言われたとき。

しかし頭はいいという厄介な御人。
何故かよく綱吉と遭遇している。

好きな相手には…特に何もしくなくても寄ってくるので何もしない。

●コロネロ

軍人馬鹿のコラコラ星人。彼の体力には誰も付いていけない。成績は数学と理科と体育のみ優秀。これらの授業だけは真面目に出ている。

体育は誰も付いていけないので一人個人メニューをこなしている。

好きな相手には…不器用ながら地味にアタックしている最中。

●ラル・ミルチ

素質を見抜き伸ばす能力に長けている指導者・教育者タイプ。
実はコロネロの個人メニューを組んだのもこの人。

自身は学年三位内に入る成績優秀者。

割と寡黙。あだ名は氷の女帝。口が悪い。

好きな相手…最近誰かさんからのアタックに戸惑い中？

●アリア

毎日をにこやかに過ごす“同朋”の絶対唯一の良心。
けれど余り身体が強くないので月一で病院に通っている。
家族が超過保護なので咳一つしただけで学校を休むこともある。
意味ありげな言動の多い、不可思議な御仁。
妹の懐いている綱吉に結構好意的。

●ヴェルデ

中一にしてとある科学賞を受賞した天才マッドサイエンティスト。

その気になれば優秀だが、テストも含めた出席率がほぼゼロのため一番成績が悪い。

第二理科実験室を私物化し日々そこで何かしら実験をしている。
スカルを一番人間扱いしておらず、しょっちゅうモルモットにする。

●マーモン／バイパー

通称金の亡者・黒い照る照る坊主。

よくレジュメの間違いを指摘してはそれに関する無駄金について語っている。

実は教師が一番泣かされている相手。アリアの次に出席率が良いので。

体育には出せない。体育教師お怒り。でも捕まらない。
何故かよくクロームと遭遇する。

●スカル

通称パシリ。“同朋”達を先輩呼びしている。
本人望まず出席率低し。理由は言わずもがな。
最近後輩（主に綱吉）にも同情される自身の境遇に頭を抱えている。

ランボ

小学四年生くらい。
こけて泣いていたところを綱吉に慰められた。それ以来懐いている。

▲ユニ

アリアの妹。小学五年か六年。
綱吉と何故か仲が良い。というか懐いている。

○獄寺隼人

母が父と子を成した後に違う男に拉致され、後に死んでしまい孤児に。

男がイタリアの人間だったので暫く彼の地で暴れていた。
十歳の頃遠縁のGに発見され、義弟として引き取られる。

Gの都合により日本へ移住。頭は良いが喧嘩っ早い。目つきが悪い。

喧嘩に巻き込まれたが自身の心配をしてくれた綱吉に尊敬を抱く。

好きな相手には直球で向かうが勘違いされてとことん避けられてしまうタイプ。

デイナー

施設に併設された幼稚園の園長。施設の管理もしている。幼稚園の先生の誰よりも子供と馴染みまた子供よりもドジっ子。原作のキャバッローネファミリーの皆様は幼稚園の先生です。

○笹川京子

たぶん綱さんの憧れの女子。クラス、もしくは学年のマドンナ？他校生のハルとは家が近所で仲良し。ちよつと腹黒気質があるとかないとか。

○三浦ハル

両親（というか父親）の意向により隣町の女子校へ通っている。娘馬鹿心配性な父親と、夫の阿呆な様子をくすくす笑うのが好きな母親を持つ。

通うのは大変だが、毎日楽しく過ごしている。時間のある時に京子達とウィンドーショッピングにいたりする。

登場人物（後書き）

年齢別从上から、



環境設定（前書き）

随時更新。

環境設定

・並盛学園

小中高一貫教育、大学付属の私立学園。

ちなみに並盛にはこの学校しかないので、公立に通いたければ交通費が馬鹿にならず基本皆ここに通う。

でも教師陣も優秀なのがかなり揃っているのであまり文句は出ない。

というか風紀委員長殿が怖くて誰も言えない。

中学と高校に生徒会があり、協力体制を敷いているが、高校側がやる気が無いので中学側が必死。

というか風紀委員長（以下略）やる気を出せない。

殆どの行事が中学中心にやる。もちろん一部の生徒は嫌がっているし怒っている。

だがしかし風紀（以下略）誰も行動に起こさない。

・ジヨット所有のマンション

並盛学園に徒歩十分の距離に位置する十階建てマンション。

セキュリティ完備で女性専用フロア（五階と九階）がある。

一階は車庫と駐輪場、二～五階は2LDK、六～九階は3LDK、十階は4LDK。

十階の一室がジヨットと綱吉、その隣がアラウディ・風・雲雀。六階に骸と千種・犬、五階にクロームの部屋がある。クロームは骸達の部屋に毎日通っている。

環境設定（後書き）

常識的に考えておかしいところもあるかと思いますが、あくまで物語上の設定ですのでご容赦ください。

人生の急展開

「ツナくーん!!」

「はい？」

施設に併設している幼稚園の先生の中でわずか二人の女の先生の片割れ兼施設のベテラン先生である女性の声に、施設歴九年となつた沢田綱吉少年は、大きく返事をしつつ一緒に遊んでいたちびっ子達にちよつと待ってな、と言い立ち上がった。

施設歴も長く面倒見の良い彼は、先生方にやや主夫化しているんじゃないかと噂されている近々中学校入学を控えている元気な少年である。

「こつちこつち」

手招きされ、綱吉は首を傾げた。彼女が立っていたのは、客をもてなす部屋の前だったからだ。

施設で客と言えば、後援者や行政関係の人、後は引き取り手ぐら이다。

（今日は特にお客さんが来るって言ってなかったよなあ…？）

ちびっ子達が騒ぐといけないので、年嵩のメンバーには事前に客の予定は知らされる。つまり、今来客があるということはアポ無しということだ。

（じゃあ引き取り手かな）

でも、何でオレ？

内心首を傾げながら、綱吉は彼女が先導するままに部屋に入った。

部屋に入ると、それなりに上等なソファが置かれている。入って正面に一人掛けが一つ、左右に三人掛けが一つずつ。間には縦長のローテーブルが一つ。

正面には施設の管理をしている通称園長が座っていたので、必然的に客は左側に座っている金髪の人物だと知れた。

（まあ園長も金髪だけど）

園長という通称も、幼稚園の園長という役職だからだ。もっとも、園長の癖に一番威厳が無いのだが。

「ツナくん、この方はツナくんのお兄さんだそうよ」

「へー。…って え え え え え ！ ？ ！ ？ ！
？」

何の話が見当がつかず、取り敢えず適当に相槌を打ったのだが、言われた言葉を理解した綱吉は悲鳴に近い声を上げつつ、慌てて件の金髪の青年を見た。

そこには、どこかで見たような…というか毎日鏡の前で見かける顔にそっくりな、顔。

ゆつたりと綱吉に目を合わせてきた青年は、にこりと笑い、

「久しぶりだな」

…と言った。

「イエ、オレ、アナタとお会いした覚えが無いんですが…？」

「覚えていなくとも無理はない。私がお前と会ったのはお前が生まれてすぐが最後だからな」

「え、と…それじゃあ今まで何を？」

「ちよつと海外で色々していた」

ちよつとつて何ですか海外つてそれマジですか色々つて何してたんですか…！！

突っ込みを口に出す前にショートしてしまった綱吉を、それじゃあわたしはこれで、と言いながら青年の向かいに座らせ、女性は部屋を出ていった。

「……ハッ」

「気がついたかツナ？」

「デイーノさん声かけてくださいよう！！」

「いや、そつとしておいた方がいいかと思ってな…」

しっかし、昔はかわいらしく園長先生！って呼んでくれてたのになあ…

「何年前の話ですかそれ」

「詳しく聞かせてもらいたい」

「って貴方も何言ってるんですかつ！？」

「ツナが来たのはまだ三歳の頃でして。あの頃はほんと可愛かった

なあ…」

「ほうほう」

「その話は置いて！！…貴方がオレの兄だというのは確かみたいですけど、何で今更来たんですかつつ！！」

どうして、今、九年も経って…！！

ぎゅっ

「…すまない」

「え、あの」

強く握られた両手。じつと見つめてくる真剣な瞳。
本気度はよく、わかるのだが。

（ちょ、痛い！！）

「家光…義父ちちとの約束でな。遺言にまで書かれていたら従うしかなくてな…」

「ゆい…ごん？」

「ああ。…ようやく約束を果たせたので、お前を迎えに来ることができた」

今までひとりにして、本当にすまなかった。

「だが、これからはずっと一緒にいられる。…だから、私と住まな
いか？」

「で、もオレ…友達もいる、し…」

「ああ、大丈夫だ。並盛学園に通っているのだろう？　すぐ近くに
マンションがある。そこで一緒に住もう」

綱吉は、目を見開く。

「…並盛で…一緒に、住む、の？」
「ああ」

更に強く握られる。痛覚よりも、感情がそれを上回り、綱吉は言葉を失った。

（…並盛に、いられるのなら）

施設でできた繋がりも、失うことは無い。

両親を失い、身寄りのない子供となった綱吉の存在を、入園が決まっていた幼稚園の園長が知ったために彼は施設に入ることができた。

悲しみに時折ぐずぐずとしながら、ともに親のいない子供達で身を寄せ合う日々。

それが辛かったとは言わない。分かち合うことができたから。…けれども。

（もう一度、本当の“家族”が欲しかった…）

今まで、引き取りの話がなかったわけではない。綱吉は秀でいるところが特にあるわけではないが、非常に人に好かれやすいからだ。

けれども彼はどの話も断り続けた。自身よりも、家族を必要としている者がいるからと。その、お人好しな気性故に。

「…園長先生」
「うん？」

「みんなに…挨拶、してきます」
「…そうか。わかった」

綱吉は立ち上がって今までお世話になりました、と礼をした。

「よせよ。ここを出たってツナはこの家族の一人なんだ。いつでも来ればいい」
「…はいっ」

元気よく部屋を出ていった彼を、少し寂しげな笑顔で見送り、園長は青年に告げた。

「どうか彼を、幸せに」
「勿論だ」

「しかし…凄い荷物だな」
「みんな何か盛り上がっちゃって…」

車の後部座席につまれた、お別れの品の数々に、青年は感心したように、綱吉は困ったように言った。
強い力で握り続けられたために真っ赤になっている手を、綱吉は少し擦っている。

「それだけお前が皆に好かれていたということだろう?」

「…うん」

「ならばそれは誇るべきだ」

「そう、かな…」

「そうだとも」

運転中なので前を見つつも、時折綱吉の方へ笑顔を向けている。

「…そうだね。ありがとう、…兄さん」

「どういたしまして」

父と母のことは、舌つ足らずながら、“父さん”、“母さん”と呼んでいた覚えがあったので、青年のことは“兄さん”と呼ぶことに決まった。やや戸惑いもあるが、そのうち慣れるだろう。

「さて、早く帰ってその手を冷やさないと…」

キキッ

「ついたぞ、ここだ」

「っ！？ え、ここ…？」

そこは、学園からも見える十階建てマンション。セキュリティ完備・女性専用フロアがあるとかで、入居者希望が絶えないが何故だか中々決まらないという噂の…

「ここ…何階なの？」

「最上階だ」

「…兄さん、すごいお金持ちなんだね…この部屋を借りられるとか…」

「うん？ 借りてないぞ？」

「へ？」

今時珍しいマニュアル車を運転している青年は、綱吉に見せるために止まったので、ギアをチェンジしつつ駐車場に入り始めた。

「このマンションは私の持ち物だからな」

「…もち…もの…！？！？」

このとき沢田綱吉少年は思った。一体どんな急展開だよ、と。

人生の急展開（後書き）

b
y
梨

些細な不安と心地よい安堵

「さて、この荷物をどうするか」

後部座席に積み上げられた荷物の上に、基本自分で運ぶという考えがないジヨットは眉を寄せる。

「あ、オレ運ぶよ」

「いや、お前の手を煩わせるまでもない。」

荷物に伸ばされた幼い手をやんわりと制し、携帯電話を取り出すジヨット。綱吉には何を言っているのかわからないが、流暢なイタリア語で話すジヨットには人の上に立つ者の威厳を感じた。

（歳は6つ上って言ってたよな。大学生なのに実業家で、こんな高級マンション持ってて……この車だって高そうだし、スーツも……）

「綱吉？」

「……ハッ！」

謎めいた兄の素性に疑問を膨らませている間に、どうやら電話は終わったらしい。

「待たせてすまない、では行こうか」

「ええ！？ 荷物は？」

「後で人に運ばせる」

（人って誰！？）

まざまざと見せつけられる兄の天性の王者気質に、平平凡凡が服を着て歩いているような綱吉が付いて行けるはずもなく……せめてこれくらいは、と衣類諸々詰め込んだバックだけは手に取ったものの、結局「手の腫れが悪化しては一大事」と真摯に言い募る兄に押し切られる形で手放した。

颯爽と先を歩く兄の背に隠れるように、恐縮しきった様子の綱吉が付いて行く。

ジョットはエントランス前のパネルに触れ、慣れた手つきで暗証番堂を入力した。

「部屋は暗証番号と指紋認証の二重ロックだ。エントランス前のパネルにタッチすれば開く。……暗証番号は忘れるなよ？ 中に入れないからな」

「うっ……頑張ります」

（絶対忘れそう……！）

確信めいた予感に冷汗を垂らす綱吉。悲愴な表情を浮かべる弟に、ジョットは少々脅しが過ぎたかと苦笑いを浮かべる。

「そう深刻な顔をするな。もし忘れたとしても、私を呼べばいいだろっ？」

慰めるように、頭一つ分以上下の栗色の頭に手を伸ばす。

（あ……）

くしゃり、と髪を掻きまわされる感触がひどく心地いいと思った。

どこか懐かしさを覚える手つき。

（父さんにも、こうして頭を撫でてもらったっけ）

「そうだね……オレには兄さんがいるんだもん」

「当然だ。ずっと、傍にいる」

胸の中を、とろりと温かいもので満たされた気がした。

「ここが私たちの部屋だ」

通された部屋は、二人暮らしには広すぎるだろう4LDK。

（掃除が大変そうだ……）

案内されて早々そんなことを考えてしまうあたり、弱冠12歳にして綱吉の主夫気質が開花し始めているのは間違いない。

「そういえば、この部屋にはオレと兄さんの2人きりだね？」

「勿論」

「兄さんって家事とかできるの？」

些か失礼な気もするが、ぶっちゃけこの兄が掃除や洗濯に勤しむ姿が想像できない。

「……家政婦でも雇うか」

答えになってないものの、これ以上ない分かりやすい回答を返してくれたジヨット。

綱吉の主夫スキルが、今後目覚ましい進歩を遂げるであろうことは最早言うまでもない。

並盛の町を一望できる日当たりのよいリビングで、ソファに隣同士で座る二人は、離れ離れだった十数年の記憶を埋めるかのごくお互いの思い出を語り合った。

「そうだ」

昔話に花が咲き、そろそろ日が傾き始める頃、ジヨットが思い出したように懐を探る。

「お前にコレを渡しておこう」

そう言って取り出したのは、漆黒の手のひらに収まるほどの長方形を模した――

「……カード？」

「そうだ」

「何の？」

「クレジットカードだ」

……。はいいいいいっ！！？？

クレジットカードってアレだよね！？「お支払いは？」「カードで」ってヤツだよね！？現金なくても好きなだけ買い物できちゃう魔法のカードだよね！？

「上限はないから好きなだけ使え」

「こんなモノ貰えないよっ！！」

生い立ちは不憫ではあるものの、その他は極々一般的な小学六年生。勿論クレジットカード（しかもブラック）なんて代物、使ったことは疎か手にしたこともない。

「遠慮はいらない。こう見えても稼ぎはいいんだ、お前一人くらいの我儘、いくらでも叶えてやれるぞ」

「そんなお金があつたら将来の貯蓄に回してください！！」

流石綱吉。言っていることがすでに主夫。

「そうだ綱吉、夕食は何が食べたい？十数年ぶりの再開だし、三ツ星レストランからシェフを呼んで——」

「そこまでしなくていいからっ！！」

この金銭感覚の違いすぎる金持ち思考の兄と、果たして自分は共同生活を送ることができるのだろうか……

綱吉はこれからの生活を思い浮かべ、愛らしい頬を引き攣らせる。心なし胃がキリキリと引き絞られる気がしたが、それは気のせいだと思い込むことにした。

それでも――

「綱吉、これからよろしくな」

「うん！よろしく兄さん！」

瑣末な不安よりも、二度と得ることのできないと思っていた家族の温もり、それを与えてくれた兄と暮らせる喜びが、綱吉の心を幸せで満たしていた。

些細な不安と心地よい安堵（後書き）

b y さゆ

主夫への道

「じゃあ宅配ピザが食べたい!!」

討議の末綱吉が捻り出したのは、その答えだった。

一先ず三ツ星レストランのシェフを呼ぶという突っ込みどころの
ありすぎる提案を却下した綱吉だったが、兄の口から次々と出てく
る提案に頭を抱えた。

「じゃあ食べに行くか？」

「テーブルマナーとかわかんないから嫌！」

「私が教えてやるぞ？」

「それはまた今度！」

「むむむ…では和食で懐石料理にでも行くか？」

「え、何それ？」

…といった具合。

この間、綱吉は内心、何でこういう考えしか出てこないかなああ
そうか兄さん自分で作るとかしたことないんだろうなってことはオ
レが作るしかないのかなそーかーでもどーせ何もないんだろーし今
から買い物行つて作つてたら寝る時間なくなるし!! たぶん兄さん
明日も仕事あるよね平日だしじゃあ手軽に食べれるもの……あ!!、
と考えを巡らせ。

やがて兄が暫し口を閉じたのをきっかけに冒頭の一言を告げたの
だった。

「宅配ピザ？」

「聞いたことない？」

「いや、ある。…そんなのでいいのか？」

「そんなので、ってか……孤児院ではピザとか、食べたくても食べれなかったから、さ」

作り方も調べてみたけど、孤児院のキッチンの設備じゃ作れなかったし…全員分が。

ぼそぼそと付け足された言葉に、全員分作れたら作ってたのか…と内心呟きながら、兄は身を乗り出した。

「ではそうするか。まずは電話番号を調べねば…」

「あ、ねえ兄さん、キッチンってどうなってる？」

言いながら立ち上がり、ジョットは電話とファックスの置かれたチェストの前に立った。

「うん？ 一通り揃えさせたが、それが？」

（“させた”のか…）「ホコリ被ってたり、しない？それ…」

「買って一週間でホコリ被るか？」

「…いつしゅうかん？」

え、今何言ったこの人。

ぼかん、と口を開けた綱吉だったが、タ。ンページを捲っていてそれに気付かなかった兄は、更に続けた。

「このマンションを建てたのは…何年前だったか？ちよつと忘れた

が、まあ十年も前じゃないだろう。それで、家光との約束を果たして綱吉を迎えに行ける準備が整ったのが二週間ほど前だな。」

お前の現状調査のためこっちに來させていた部下に、必要最低限揃えておけと言っておいたから、実は私もよく知らん。

（…どこから突っ込めば？）「…現状調査？」

「ああ。約束を果たすまでは一切手を出すな、と言われていたのだから…、しかし、両親ともども事故で亡くなるということは流石の家光も想定外だったはず。そう思い、綱吉の身に何かあったら…と思ってな」

「約束、って何だったの？」

そういえば、と問えば。横顔を向け視線を手元に落としていたジヨットは、不意に顔をあげ綱吉を見た。

「…そうだな。端的に言うなら…、年収が一定の金額に至るまで日本に戻ってきてはいけない、というものだ」

「…ナニソレ…？」

「細かいルールはまだまだあるが、まあこんなところだな。」

「ちなみにその約束、いつしたの…？」

「日本を離れる前で、綱吉が生まれて少しした頃だから…約十二年前か？」

片手を顎に当て、目線を空に向けて答えた兄に、綱吉は何とも言えない表情になった。

「兄さん、その頃幾つ…？」

「うん？六つだったか？」

「自分の年だろっ そんな子供にお金を稼ぐ方法なんてあるわけな

いじゃん!!」

「うむ。日本なら、そうだな」

“日本”なら…?

「だから海外に行ってたの? っていつか何してたの? あ、今もしてるのか」

「まあな。 何をしてるか…は一概に言えないが、例えば有力な企業や個人に出資してみたり、だな」

「出資? って、えーと…何だっけ?」

「社会科でそのうち習うだろう」

今急いで覚えることはない、とにこりと笑ったジヨットは、再び視線を落とした。

(…っていつか何の話してたんだっけ?)

えーと、夕飯の話になって、高級料理なんて無理だから宅配ピザを取ってもらおうと思って、それで…

(あ!!)

何故キッチンのことを聞いたか思い出した綱吉は勢いよく立ちあがった。

「ん?」

「オレ、ちょっとキッチン見てくるね!」

部屋に入ったとき、一通り説明してもらったので流石に場所はわかる。何よりダイニングキッチンになっているから、目の前にある

のも同然なのだ。

ちなみに部屋の間取りは、入ってすぐ左手に二部屋、右手にトイレとバス等。正面に進むと見晴らしのいいリビング、その手前にダイニングキッチン。リビングの両側に一部屋ずつ、という具合だ。奥二つの部屋はジョットが使っているとのこと、残る二部屋は自由にしていいと言われたが、ベッドと机と箆笥だけは用意して置いたという一部屋を見た綱吉は、その部屋だけで充分だと思った。何せ広いのだ、どんなに少なくとも四人部屋で集団生活をしてきた綱吉にとっては。

「うわ、ここも広…」

殆ど見えていたが、改めて見るとやはり広い。

兄仕様なのか高く作られているので、少々不便に思いつつも、届かないのは上の棚だけなので取り敢えず下の引き出しの確認をすることにした。

「……………」

どこが必要最低限？？

別段、包丁等の器具が多すぎるとか、サイズが大きすぎるとか、そういうわけではない。寧ろ綺麗に揃えられている。

だがしかし、どうみても一般家庭の台所にありそうもない道具が幾つか見受けられるのだ。

（これってどうみても本格的な中華鍋だしこっちの圧力鍋もでかいしあつ普通サイズのもある！！じゃあ何々だこれ…？？！？）

ガチャガチャと漁り、大体把握した綱吉はふう、と息をついた。

(…まあ、多少変なものもあるけど、普通のものもちゃんとあるから、いいか)

そう思つて無理矢理自分を納得させた綱吉は立ち上がりかけて、話やテレビには聞いていたが、初めて間近で目にするものを見つけた。

「これって…オープン？」

うわあ、すげえ…！！

「どうした綱吉??」

そうして暫くの間、キッチンの散策に時間を費やしていた綱吉は、兄に真後ろで声をかけられるまで気づかなかったのであった。

「わあおいしそー…！」

「では食べるか」

「「頂きます」」

ものの数十分で届いたピザに、ほくほく笑顔の綱吉。そんな綱吉を見て嬉しそうなジョット。

会って初日だというのに、幸せそうに食事を始めた(義)兄弟の

姿は、何だかとても目の保養になりそうな光景である。

「（ごくん）そういえば兄さん、あのキッチン幾つか妙な道具があるんだけど…何で？」

「んん？さあな…ああ、用意したのはたまに私に料理を作ってくれる奴だから、そのせいかもしれないな」

「…女の人？」

「いや？男の幼馴染だ」

次の一口を口に入れてかけていた綱吉は手を止め、言われた言葉を頭の中で反芻して、聞き返した。

「…幼馴染の、男の、人…？」

「ああ。私がほつとくと何も食べないからと言って昔からよく作ってくれるのだが、幼い頃は恐ろしいほど不味くてな。今は違うが…」

「…兄さんもしかして舌が肥えてるとか言われない？」

「ああ、よく言われるぞ。G…その幼馴染にな」

（…Gさん。憐れ…）

恐らく、本格的に作った本当の美味しいものしか食べないのだから兄に、食事を無理矢理させてきたのだろうその幼馴染に同情する綱吉。そしてふと気づく。

「え、じゃあ…これ、美味しい？」

「うむ。まあまあだな」

（…基準はどこら辺にあるんだろうなあ…）「オレ、そのGさんに会ってみたいな」

「わかった。そのうち紹介しよう」

「兄さん」

「ん？」

「あの、さ…現金って、ない？」

「何故だ？」

「明日買い物に行つてこようと思つて」

風呂に入つてさっぱりとした綱吉は、思った通り氷を作るためだけに稼働していた冷蔵庫（何て無駄な！！）に、本来の仕事をさせようと、兄にそう言つた。

「さっきカードを渡しただらう？」

「いやあんなものスーパーで出したら卒倒されるよ。っていうか見た目中学生にもなれないオレがあんなもの出したら捕まるって…」

悲しいことに。

「うつむ…。わかつた、ちょっと待っている」

そう言つたジョットは、自室から白い封筒を持ってきて、綱吉に手渡した。

…ずっしりと、重い。

「…何、これ…？」

「日本に来て両替した現金の一部だ。」

「いやこんなにいらなから…、千円もあれば十分だよ…?」
「そうか?」

じゃあ、と一枚引き抜かれて渡されたのは、案の定、綱吉にとつては手に取るのも初めてながら、目にするのも初めての諭吉さん。

(…お釣り幾らになるかな…?)

いっそのこと散財だと叫ぶ理性を無視して、無駄に高い食品でも買おうかと、頭を抱えて悩む綱吉なのであった。

主夫への道（後書き）

b
y
梨

受難との遭遇 1 - 1

十二年ぶりに、生き別れの兄と感動の再会（？）を果たした翌日。

予想だにしないシンデレラストーリーの主役到大抜擢された沢田綱吉12歳は、今現在エコバック片手に夕食のメニューに頭を悩ませていた。

（ポテトサラダと、野菜スープと……兄さん、ハンバーグはデミソースと和風ソースどっちが好きかな？あ、好き嫌いとか聞いとけばよかった……）

そもそも、果たして自分の作る料理がああ兄の口に合うのだろうか？宅配ピザですら「まあまあ」なのだから、自分の料理なんてもっと酷いのでは……

（でも、これから一緒に暮すんだから兄さんの好みの料理も作れるようにならないと……！）

何事も経験が大事。ジョットの食事係（と綱吉は認識している）Gも最初は散々ダメ出しを喰らってたらしい話を思い出し、まあ何とかなるだろうと腹を括った。

ちなみに、ディーノから「ツナの料理は子供たちの間で評判なん

だぜ！」と自慢げに聞かされていたジヨットが綱吉の手料理を楽しみにしていたことを綱吉は知らない。

そして、そんな弟の手料理をジヨットが喜ばないはずがないのだ。

「ただいまー……あれ？」

玄関を開けると、そこにはきれいに磨かれた革靴が二足、きちんと揃えられていた。

（お客さんかな？）

邪魔をしてはいけなと静かにドアを閉めたところで、声に気付いたジヨットがリビングから顔を出しす。

「おかえり。ふむ、無事買い物はすんだようだな」

「兄さん、オレ後1・2週間で中学生だよ？買い物くらい一人で行けるって……」

「そうだな、すまん」

「兄さんは仕事終わったの？」

「ああ、綱吉の夕飯を食べるために早めに切り上げてきた」

「そ、そっか。お疲れ様」

気持ち嬉しいけどそれでいいんだろうか……ジヨットの仕事を詳しく知るわけではないが、社会人としてどうなんだろうと真剣に考えてしまう綱吉。

「丁度いい、お前に紹介したいやつがいるんだ」

「オレに？」

「ああ、あいつも綱吉に会いたがってたな。これから何かと世話になるだろうし……」

何やら含みのある言い方をするジヨット。

（どんな人だろう……）

人見知りの気がある綱吉は緊張した面持ちで、先を歩くジヨットの背に隠れるようにして付いて行く。

「紹介しよう。こいつはアラウディ。ハイスクールからの友人で、今は部下として働いてもらっている。アラウディ、こっちが弟の綱吉だ」

「わわっ！！」

背中を押されてつんのめる形で前に押し出された綱吉を、華奢な腕がしっかりと支えた。

「大丈夫かい？」

「わ、す、すみません！！」

（うわっ……！！すっごい美人……！！）

綱吉を支えたのは、黒のスーツに身を包んだ青年——アラウディだった。

アラウディの切れ長の瞳がまっすぐ綱吉を捉える。どれほど見詰め合っていたのか、いよいよ綱吉が視線に耐えきれなくなった頃、薄く色づいた唇が緩やかに弧を描いた。

「はじめまして、ツナヨシ」

「は、はじめましてっ！」

差し出された手にそっと触れる。

（手、冷たくて気持ちいいな……………って、オレ何考えてんの！？）

頭を過った思考にショックを隠せない綱吉少年12歳。

「アラウディ……………あんまり家の弟を惑わしてくれるな……………」

「惑わす？何のことだい？」

「……………これだから天然無自覚は性質が悪い」

「よくわからないけど、ハイスクール時代から大の大人を手玉にとつて笑顔で転がしてるような男に、『性質が悪い』なんて言われたくないよ」

「え？手玉？」

「綱吉は知らなくていいことだ」

「え？うん……………」

（なんだろう……………兄さんの笑顔が怖い……………）

完璧すぎる笑顔の裏から、有無を言わさないオーラが漏れ出している気がする……………

賢明な綱吉はそれ以上詮索するのはやめてアラウディに向き直った。

(……って！ちちちち近い！！！！！)

鼻先が触れ合うんじゃないかというくらいの至近距離で、じ……っとひたすら見つめられる。はつきり言って、居心地悪いことこの上ない。

「あああああのおっ！！！！？」

「……ジヨットとよく似てるね。でも、ジヨットより可愛い」

「ええええっ！！！！？」

いきなりの「可愛い」発言に綱吉の思考回路はショート寸前。真っ赤になつて狼狽える綱吉をよそに、アラウディは納得した様子でうんうん頷いている。

「うん、小動物みたいだ」

あやすように頭を撫でられ、喜んでいいやら何やら内心非常に複雑な心境の綱吉。しかし、当のアラウディは至極ご満悦な様子で――

「クッ、クククッ……！！！」

あらぬ方向を向いているジヨットだが、何分笑いが堪えきれない。

「兄さん……！！！」

(笑ってないで助けてください！！！)

縦るように自分を見つめる弟に、兄はニヤリと笑ってみせた。

「ククッ！すまん……こいつは天然だからな、気をつける」

「兄さん！！??」

「??」

顔を真っ赤にして慌てふためく綱吉と、崩壊寸前の腹筋を抱え肩を震わせるジョット、そしてきょとんと首を傾げながらも綱吉を撫で続けるアラウディ。

「と、とりあえず！何か、飲みませんか！！??」

度重なるアラウディの天然攻撃にやられた綱吉が混乱する頭でようやく思い出したのは、「そういえばお客さんにお茶も出してなかった」という物凄くどうでもいい事実だった。

受難との遭遇 1 - 1 (後書き)

b
y
さ
ゆ

受難との遭遇 1 - 2

「そうだな…」「そうだね…」

呑気な台詞に、綱吉は肩を落とすとともに視線も下へ落とし、ハッとした。

そこには、足元に散乱している、エコバックの中身。

「やばっ!？」

今日買ったものの中には卵もあるのだ。慌てて中身を確認した綱吉は、上のほうにあったおかげで被害のない卵に一先ずほっとする。次いで、ならば下の方にあるものとは思いつき分けて、泣きそうになった。

「ってそんな場合じゃなかった、兄さん雑巾どこにあるかな!？」

「雑巾??」

綱吉の様子を見守っていた大人二人は、六つも下の少年の剣幕に困惑している。

「牛乳のパックがちょっと破裂してて中身漏れてるんだよ、早く!」

「雑巾…」

「タオルで良いんじゃない?」

「ああ、そうだな」

そうしている間にも、綱吉は他に被害を受けているものはないかと選別していく。

「あーあ、このバック使い勝手が良くて気に入ってたのに…」

わざわざ孤児院から持ってきた品なのである。

「ほら、綱吉」

「…ありがとう、兄さん」

受け取った真っ白のタオルに、何とも言えない顔をしつつ、綱吉は漏れた牛乳を拭き取ると、エコバックと雑巾と化した新品のタオルを風呂場へと持って行った。

桶には入りきらないので、浴槽に少なめに水を張って、そこに付けておく。

戻ってくると、兄はリビングのソファに座っており、アラウデイがキッチンにいた。

「ツナヨシ、コーヒー飲むかい？」

「え、いや…その、苦いのダメで…」

「ふうん。じゃあ紅茶で良いかい？」

「あ、はい…」

客に茶を淹れてもらうのもどうかと思ったが、自身では何も用意できないことをよくわかっていたので（何せ今日買ってきて来るまで麦茶も烏龍茶もほうじ茶もなかったのだ！）、綱吉は頷くだけにとどめた。

そこで、床に放置したままの野菜類を、コーヒーマーカー（途中アラウデイが説明してくれたことによると、豆から挽いてくれ、様々な種類に対応している素晴らしい機械らしい。）の前に立つアラ

ウディと一言三言交わしながら、綱吉は何度も往復し片づけた。

「砂糖とミルクは？」

「あ…、その、飲んだことないので…」

「じゃあつけとくから好みで加えてみなよ」

そこでやっと一息つける段階となった。

「ああ、準備できたか？」

「兄さん…何してたの？」

「ちよつと株の様子をな」

株…株って、あの、持っているとお金が入ってくる紙のことだね、確か。ディーノさ…園長先生も何か株取引がどうのこうのって言ってたよなあ…

ちよつと遠い目をしつつ、言われるままに綱吉は、ネットブックを広げていたジョットの隣に座った。アラウディは二人の正面のソファだ。

「茶菓子も何か買っておけばよかったな…」

「君、夕飯食べに帰ってきたんじゃないかったの？」

「あ、そうだオレ準備しないと…」

「まあ待ちなさい。そんな急がなくても良いだろう？」

「でも…」

綱吉は目の前の黒いままの液体をそのまま飲み込んだ兄に目を見開き、固まる。

「綱吉はまだ休みの期間なのだし、私の仕事も今はそれほど忙しい

時期じゃない。焦らずとも大丈夫だ」

「…そう、なの？」

テーブルを挟んだ向こう側で、アラウデイがぼそりと何か言ったが聞こえず、不安げに綱吉は兄と兄の部下を見比べた。

「……………、ジョットが言うんなら、そうなんじゃない」

沈黙に何を思ったのかは知らないが、やや目線をそらしつつアラウデイが言った。

「ほら、な？ 綱吉も飲みなさい、初めてなんだろう？ 冷めないうちに」

「う、うん…」

言われて手を伸ばす。綱吉は知らないがそのカップのセットも高級品だ。知らない方が幸せだろうが。

まずは言われるまま、何も入れず一口。

(んん…？)

紅茶、というものはお客さんに出すもので、やたらと高級なイメージがあつた。想像もつかない味がするのかなという思いも。

だがしかし、目にし口に入れてみれば、それは名の通りただの“紅”い色のお“茶”だ。

「ミルクを入れると少しまろやかになる。砂糖はもちろん甘味だ。どうする？」

「…うん。ミルクだけ入れてみようかな」

そこで美味しい味を開拓した綱吉は喜色満面の笑みで飲み干した。もちろん、ジョットはそんな弟を微笑ましく喜ばしく見ているし、アラウディはそんな友人兼上司に呆れつつも、彼もまた綱吉の挙動を微笑ましく思っていた。

やがて空になったカップをじっと見つめていた綱吉は、正面のア
ラウディをじっと見た。

「……………何？」

その視線に、ジョットと何かしら似通ったものを感じ少し怯んだアラウディだったが、コーヒーを口に運ぶ手を止め綱吉を見つめ返した。

「あの、オレに紅茶の淹れ方教えてくれませんか？」

綱吉はちゃんと見ていた。

孤児院にいた頃、先生達が客に出していた紅茶はティーバッグで淹れていたのに、アラウディがそうはしていなかったのを。

「…ボクに？」

「オレは今のところアラウディさんしか淹れ方を知っている人を知りませんし…、兄さんは知らなそうだし」

「悪かったな」

「……………ジョットは基本、仕事しかできない人間だからね」

フォローとも馬鹿にしているようにもとれる発言に、ジョットは拗ねているような表情になったが。二人は気づいていない。

「ボクよりも適任者はいるような気もするけど…、良いのかい？ジ

ヨット」

「一番紅茶を淹れるのが上手いのは向こうに置いてきたアレだが、アレと綱吉は会わせたくない。Gも淹れられるが、お前の方が上手いだろう?」

「…まあね」

(……“アレ”?)

発言からは人物のことを指しているように思うのだが、どうにも人間扱いされていないように感じるのは何でだろう、と綱吉は内心首を傾げた。

「わかった。教えてあげる。いつが良い?」

「え、っと…アラウディさんの都合の良い日でいいですっ」

「……………だつてさ、ジヨット」

じろり、とアラウディがジヨットを見たので、綱吉もつられて兄を見た。

「…わかった、伝えておこう」

言うが否や、彼は携帯を取り出し立ち上がってベランダへと出て行った。

「…へ?」

「それでもそれなりに忙しいんだ。君が中学入学してしばらくしてからになると思うけど…」

「あ、いや、そういうことなら仕方ないです、」

そう言って断ろうとしたのだが。

「喜ベアラウデイ、Gが次の一カ月分仕事を交換してくれるそうだ」
突如、ジョットの声が飛んできて綱吉は驚いた。アラウデイも瞋をあげている。

随分離れているのだが、『オイジョットメエ聞いてやがんのか
オラアアアア！！！』とか何とか聞こえる気がするのは気のせい
だろうか、綱吉は冷や汗をかく。

「…つまりボクは次の一カ月日本勤務ってこと？」

「ああ」

「……、だそうだよツナヨシ。良かったね」

「あ、はあ…」

「別に隣なんだから良いのに…」

玄関を出て見送りをしている綱吉に、アラウデイは苦笑して言った。ちなみに、ジョットはさっきから商談だとかですつとネットブックの前で電話をしている。

「いえ、親しき仲にも礼儀あり、ですから！」

「まあ、ジョットもいつも似たようなこと言ってるけどね…」

ふいに、頬に手を当てられ、綱吉はきょとん、とアラウデイを見上げた。

それなりに濃い時間を過ごしたので、初対面ほど見惚れはしない。

(…あれ…?)

とはいえ、実際のところ初対面以外でこれほどまじまじと目の前の彼の顔を見ていなかったのも、綱吉はあることに気づき戸惑った。

(見たことある、ような…え、何で今更?? うーん、どこかで会ったことある…わけないか。何々だろう…?)

いつもなら目がうるうるするのだが、考えにばかり思考がいつてしまい、じいっとアラウディを見つめていることに気付かない綱吉。

アラウディといえば、そんな綱吉にやはり、ジョットと同じものを感じて。

「ツナヨシ」

「…へ、あ、はい」

「ジョットみたいにならないでね…」

「……はい?」

遠い目をして言うアラウディに、綱吉はこてん、と首を傾げた。

「……何してるの」

突然響いた冷え冷えとした声に、アラウディが振り返り、綱吉は彼の横を覗く。…そして、固まった。

「キョウヤ」

「今日は帰って来ないんじゃないの」

「今から戻って準備をしてから仕事へ行くとところだよ」
「そう。じゃあさっさと行けば」

片や、どこか飄々とした様子で言葉を流し、片や、冷え冷えとした様子で言葉を紡ぐ。

そんな顔立ちこそっくりな二人に、綱吉は固まりながらだらだらと冷や汗をかく。

後からやってきた、綱吉より少し上に見える少年の存在を、彼はよく知っていた。…と同時に恐れていた。というか並盛で恐れていない人間の方が少数派だろう。

（そっかオレこの人のこと遠目に見たことあったもんだから見たことある気がしたのかっていうかアラウディさんこの人とどんな関係なのっていうかこの人本当にオレの知っている“あの人”なのかなっ！？）

混乱の最中、思いついたのはそんな考え。世の中には顔の同じ人間が三人はいると聞く。

「あ、の、…アラウディさん、彼、は…？」

「ん？ ボクの下弟の、ヒバリキョウヤだよ。確かツナヨシの一つ上じゃなかったかい？」

「知らないよ。誰ソレ」

「昨日から隣に住んでるんだよ」

「ふうん」

そんな兄弟の会話なんて綱吉の耳にはもう入っていない。入っていたら一つ、重要な情報があったことに気付いただろうが。

（ヒバリキョウやって、やっぱり、この人、ヒバリさん！?!?!
?）

“並盛の秩序”、“恐怖の風紀委員長”、小学校時代から轟くその名聲（あるいは汚名…?）を背負う人物の登場に、綱吉は取り敢えず目尻に涙が滲むのを感じていた。

受難との遭遇 1 - 2 (後書き)

b
y
梨

受難との遭遇2

まさか、並盛の絶対王者と兄の友人が兄弟だったなんて……！！！！！！

（世間は狭い……って狭すぎだろ——っ！！！？）

そっくりな二つの顔を見比べ、綱吉は受け入れ難い現実を必死に飲み込んだ。

「ヒ、ヒバリさん（ひいひいひいっ！！睨まれた！！）って、アラウディさんの弟だったんですね」

「うん。綱吉はキョウヤのこと知ってるんだね」
「ええと……」

並盛における恐怖の代名詞ですから——なんてことを本人の目の前で言えるはずもなく……視線を逸らした綱吉に、アラウディは弟の素行をおおよそ察したようだった。困ったように眉を寄せて、雲雀を見る。

「キョウヤ、相変わらずやんちゃしてるみたいだね」
「うるさい」

”恐怖の風紀委員長”の横行を「やんちゃ」の一言で片付けたアラウディ。誰もが恐れる雲雀恭弥も、彼にとっては可愛い弟ではない。雲雀を窘めるアラウディは、弟を心配する兄そのものだった。

——最も、雲雀にとってそれは屈辱でしかないようだ……

「わざわざ説教するために帰ってきたの？鬱陶しい」

「キョウヤ……」

「貴方の指図は受けない。さっさと消えて」

取りつく島もない辛辣な態度にも、アラウデイが怯む様子はない。しかし、氷碧の瞳が僅かに悲しげに歪んだ様子に、綱吉も雲雀も気づくことはなかった。

「君のすることに口出しする気はないよ。でも綱吉に挨拶くらいして。お隣さんなんだからこれからお世話になることもあるだろう？」

「関係ない」

「はあ……ごめんね、ツナヨシ。キョウヤ、今日はイライラしてるみたいで」

「誰のせいだと思ってるの」

険悪な——というより、一方的に雲雀が敵愾心を剥き出しにしている——2人の様子に冷や汗を流していた綱吉の耳に、とある言葉が引っかった。

「あの——」

「「何？」」

なけなしの度胸を振り絞って声をかけると、ぴったりのタイミングで瓜二つの顔が振り返った。息の合った行動に「やっぱり兄弟なんだな——」と綱吉が妙に納得したのは秘密である。（雲雀にばれたら間違いなく咬み殺される）

「今、お隣さんって聞こえたんですが——」

「そうだよ」

「だから何」

何を今更、といった様子で小首を傾げるアラウディと、どうでもいいと言わんばかりに吐き捨てる雲雀。

そう、綱吉とアラウディの家はお隣さん。雲雀がアラウディの弟ということとは当然雲雀もお隣に住んでいるわけ――

（オレ、ヒバリさんとお隣さん！！！？）

あの雲雀恭弥と対面した、という事実だけでも衝撃的だったというのに、まさかこれからひとつ屋根の下（？）で生活することになるなんて……！！つい一昨日まで普通の平凡な小学生だった自分はどこへ……と、綱吉は無性に泣きたくなった。

「綱吉？何してるんだ？」

電話が一段落ついたのだろう。玄関から顔をのぞかせたジョットは、打ちひしがれる綱吉を訝しげに見る。一方、新たな人間の闖入に苛立つ雲雀。

「同じ顔……僕の前で群れないでくれる？不愉快」

不機嫌MAXの雲雀にも、ジョットは臆する様子はない。寧ろ、面白がるように目を眇めた。

「ああ、アラウディの弟か」

「うん」

「ほう……流石兄弟だ。よく似ているな」

「そう？ジョットと綱吉だって似てるじゃない」

どこか嬉しそうなアラウディとは対照的に、雲雀は非常に不愉快

そうに顔を歪めていた。

「それに、上の弟の方はもつとキョウヤに似てるよ」

いや、キョウヤが上の弟に似てるのか——ごく自然に明かされた
事実、綱吉は今日何度目かわからない驚愕の声を上げた。

「もう一人弟さんがいるんですか!？」

「うん。キョウヤの1つ上でフォンって言っただけど」

フォンの名前に雲雀がわずかに反応するが、気づいたのは事の成
り行きを見守っていたジヨット一人だった。

「フォンもキョウヤも並盛中だから、ツナヨシにとっては先輩だね」

弟たちをよろしく、と一片の邪気の欠片もない笑顔で言われて、
綱吉が断れるはずもなく——

「う、こちらこそ……よろしく、お願いします……」

新生活が始まるに伴って激変する人間関係に、少年は不安を覚え
ずにはいらなかった……

(せめて、フォンさんがまともな人でありますように……!!!!!!)

受難との遭遇2（後書き）

b
y
さ
ゆ

受難との遭遇3

それは、始業式が翌日に迫ったある日。
予てから約束していた紅茶の淹れ方レッスンの、二回目の途中の
出来事であった。

「それですね、兄さんつては明日キラキラのラメ入りのスーツ着
て行くつて聞かなくて…」

「まあ、それくらい普通だからね」

「どこの世界の普通なのか知りませんが、ここは日本の片田舎も
同然の土地なんです。違う世界の一般常識を持ち出されても困るん
ですよ…」

「…それで、ジョットの暴走は止められたの？」

「先日、代わりのスーツと一緒に買いに行くつてことで妥協して貰
いました。…ついでに何でかオレの分も買っ…つてか仕立てて貰い
ましたけど…」

第一、数週間前まで小学生だったガキにスーツ選びなんて出来る
はず無いのに…

「へえ、どんななの？」

「え？ 店員さんに頼んで、無難に…ええと、紺色？つばいのを幾

つか見立てて貰って、それで…」

「ジョットのじゃなくて、ツナヨシのスーツだよ」

「へー？ いや、オレの分はその…兄さんが全部仕切ってたんでどうなったのか、よくわかんなくて…」

「ふうん…」

一通りやり方を教え、手取り足取り教えて貰った末の、一杯。アラウデイの評価は72点。

70点以上が合格ラインなので、取り敢えずはその一杯でティータイムに。世間話として上がるのは、綱吉の入学式に関することが主だった。

「今度、見せてね」

「絶対着られる自覚があるんで嫌です……っていうか兄さんは既製品なのに何でオレはオーダーメイド…」

「ジョットの趣味でしょ」

趣味？と首を傾げる綱吉。もしくはコダワリかな、と呟くアラウデイ。

「…ええと、意味がよくわかりません…」

「わからなくてもいいんじゃない」

(……時々意味不明な発言になるのやめて欲しいなほんともう…)

ちなみに綱吉のこの内心は、兄との対話の中でもしよっちゅう出てくる。

「制服は？」

「ああ、それはディーノさ…園長先生が『見栄張ってもしょうがねえ、どうせ買い換えなきゃいけない時期が来るんだから今のに合わ

せたのにしとけよ!』って言って大して大きいサイズのものを買ったりしなかったんで…」

「買ってたらジョットののことだから、ぴったりのものをすぐ用意しようとしただろうね」

「ええ、ほんとに…」

というか、用意されるところでした…、と肩を落とす綱吉。

「彼のことだし、半年に一回くらい買い換えようとするんじゃない?」

「ええ!? …いや、そうかも…先に言っとかないとほんと暴走するしな兄さん…」

「そうそうツナヨシ、それ飲み終わったら次やるかい?」

「あ、はい」

会話の内容が飛ぶのはもはやデフォルトだ。

飲み終えたカップを手に、二人はキッチンへ向かう。

間取りは

どの部屋も同じになっているので、間違うことはない。

そこへ、玄関の戸が開く音がした。

「ただいま帰りました」

「おかえり」

「お、お邪魔してます」

にこやかに入ってきた、さすがは兄弟という顔立ちの少し年嵩の少年に、綱吉は少しびくつきながら声をかけた。

何しろあの雲雀恭弥の兄である。更には横にいるアラウディの弟である。どんな性格をしているのか、想像もつかない。

「おや？ どちら様ですか？」

「ジョットの弟のツナヨシだよ」

そうですか、とどちらかというとき雲雀に似ている少年は微笑みを浮かべたまま言った。

（髪も目も黒いせいかな……、っていうか、何か良い人そうだし…）

ちょっとホッとした綱吉は、自分から一歩前に出てもう一度自己紹介をした。

「沢田綱吉といいます。この間兄さ…ええと、ここの隣の、ジョット、の部屋に引っ越してきました。よろしくお願いしますっ」

「これはこれは。私は風フオンといいます。この家の次男です。…弟とは会いましたか？」

ぺこり、と頭を下げれば、同じように、しかし優雅な礼が返ってきた。

「あ…はい。それにオレも並盛学園の生徒なんで…」

「そうですか。ちなみに何年生です？」

「あ、明日中学入学です」

「では私の二つ下ですね」

…ってことは今年この人は三年生なのか…

綱吉がそんな感想を抱いていると、風はふと綱吉の向こうに立つ自身の兄へと目を向けた。

「ところで、二人で何をしていたのですか、兄さん？」

「ツナヨシに紅茶の淹れ方を教えていたんだよ」

「……二人つきりで？」

「？ もちろん」

「へえ」

笑顔だ。笑顔、なのだが。

（な、何か薄ら寒い気がする…！？）

どちらかというと鈍い方の綱吉。しかしどちらかという空気は読める。難儀な性格である。

「それで、上手になっただんですか、綱吉さん？」

（さん付け！？）「えっと、呼び捨てでいいですけど…。その、まだ練習途中というか…」

「これは私の癖ですから。そうですか…」

（こ、怖い何か怖い怖い怖いー！！）

内心震え上がっている綱吉を余所に、顔だけは殆ど同じの兄弟は暢気に会話を始めた。

「駄目じゃないですか兄さん。何も知らない人と二人つきりになるなど」

「？？ ツナヨシはジョットの弟だけど」

「確かに彼は信頼に値する人のようですけどね…」

ふう、と息をついて視線を一時そらした風の目に過った感情に、誰も気付かなかった。

「フォンが何を心配してるのか知らないけど、ツナヨシは良い子だ

よ

「……………そうですね。」

（その沈黙何々ですかって聞きたいけど聞きたくないいい！！）

そして今兄さんの言ってた“アラウデイさんは天然”の意味がよくわかった気がする……………っっ！

段々と内心の震えが表面化している綱吉だったが、暢気に会話している兄弟は気づいていない。

「綱吉さん、明日入学式でしょう？準備は良いんですか？」

「へー？ あ、ああ…兄さ…兄が調子乗って色々してくれたのでもう何もすることがなくて…」

「さすがジョット」「…………厄介な」
「？」

感心したようなアラウデイと、ぼそりと何かしら呟いた風。風の言葉は二人に届いていない。

「……………ところで、ここで何していたんです？」

風の不意の質問に、アラウデイはああ、と思い出したような顔をし、綱吉はハツとした。

二人はキツチンに入る直前の場所で止まっており、確かに何をしようとしていたのかと疑問に思わなくもない。

「もう一度淹れようとしていたんだよ。フォンも飲むかい？」
「是非」

にこやかに笑う風に、綱吉はふと思った。

（こっちの兄弟仲は良いみたい…）

先日会った時の、アラウディと雲雀の仲は一方的にとても悪かった。では、次男と三男ではどうなのだろうかという疑問も湧く。

（ヒバリさんのことだからどっちにも突っかかりそうだけど…）

真実を綱吉が知る日は、実は近い。

「78点ですね」

「厳しいですね…まあアラウディさんと評価同じですけど…」

「……兄さんと何かあったら、弟が容赦しませんよ」

「はいっ!？」

ぼそりと笑顔のまま言われた言葉に混乱する綱吉。

（っていうかやっぱりこの人まともじゃねえー!?! 何でヒバリさんが出てくんの、ねえ!?!?!）

ちよつとずつ進歩している自分の腕を自分で慰めつつ、綱吉は明日のことを考えて現実逃避するのだった。

受難との遭遇₃（後書き）

b
y 梨

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2623x/>

同じ顔ですが何か？

2011年10月20日17時11分発行